【地図の散歩道】―　文豪と地図　1　―

「なめとこ山」の地名のことならおもしろい ～ 宮沢賢治（1896-1933）

今年は、宮沢賢治生誕 110 年にあたり、「イーハトヴ」岩手県では、多くの行事が催されています。

その宮沢賢治（1896-1933 の作品には、おもしろい地名が数多く出てきます。中でも、「なめとこ山の熊のことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ」という、特徴的な書き出しで始まる「なめとこ山」は、その際たるものです（作品名は「なめとこ山の熊」）。

当然のことですが､創作された地名というものは､国土地理院の地図に記入されません。しかし、「なめとこ山」は、現在の地形図にカタカナ表記ですが記載されています。どうしたことなのでしょう。土壌・地質や地理・地図にも知識が深かった宮沢賢治に敬意を表して、特別の計らいをしたのでしょうか。

その間のことは、以下のようなことでした。

この作品に含まれているいくつかの地名のうち「中山街道（中山峠）」「鉛の湯」「大空滝」は、当時からずっと実在していましたが、主人公ともいえる「なめとこ山」だけは、ある時まで場所が不明でした。

賢治の生誕 100 年に当たった平成 8 年のこと、関連行事の一環として、この特徴的な「なめとこ山」を何とか特定しようという動きになりました。

童話本文に書かれた記述から、地形図をにらめっこするものもあったでしょう。しかし、「・・・なめとこ山は一年のうち大ていの日はつめたい霧か雲かを吸ったり吐いたりしている。まわりもみんな青黒いなまこや海坊主のような山だ」のせいでしょうか、探索も霧の中でした。

ところが、ある自然保護団体が調べを進めるうちに、当時の花巻市長の吉田功さんが市内の古美術商から求めた古地図を所有していること、そこには、山の記載があることが分かりました。そして、その団体に所属していた佐藤孝さんらによって所在地を特定させる作業が行われたのです

「なめとこ山」は実在する山であること、地図には、カタカナ表記されているということをつきとめました。

花巻市は、早速国土地理院に申請しました。

「へー、これって、現地でそのように呼んでいるということですか？過去に『呼んでいた』ではないですか」

「そう固いことは言わないで、これから呼ぶということで、いいじゃないですか」

といったやり取りがあったかどうか？

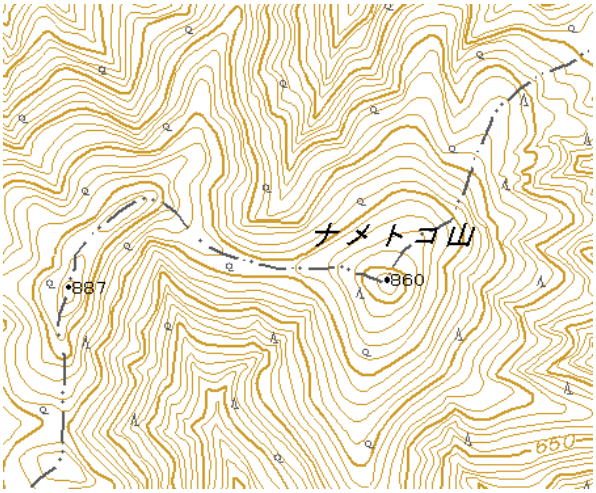
「ナメトコ山」は、地形図にめでたく記入されたのです。

では、賢治の童話の中の記述と、古文書にあったという現在の表記位置は一致しているのでしょうか。私が童話を読んで地図とにらめっこした限りでは、かなり難しいものがあります。それはともかく、賢治の思いは、果たしてそのようなことだったのでしょうか。

「青黒いなまこや海坊主のやうな山々に囲まれたなめとこ山」は、「イーハトヴ」と同様に

あくまでも心の中にあるべき地名だったと思うのですが、いかがでしょうか。

ナメトコ山（中央奥）



ナメトコ山が記入された地形図（1/25,000「須賀倉山」）

【散歩ポイント】
宮沢賢治記念館：花巻市矢沢 1-1-36　0198-31-2319
イギリス海岸：花巻市　北上川西岸（北上川と猿ヶ石川の合流点附近）
羅須地人協会：岩手県花巻市葛 1-68　花巻農業高校構内
（つい先ごろ、花巻農業高校構内に宮沢賢治の銅像が建てられた）

【地図の散歩道】―　文豪と地図　2　―

石川啄木と地図の歌 ～ 石川啄木（1886-1912）

手元にある石川啄木（1886-1912）の全集から地名が入った歌を調べてみると、全部で36首あります。その内訳は札幌や函館・釧路など北海道の都市名が入ったものが一番多く18首、故郷岩手が9首、東京が7首、外国のもの2首。その中から、「地図」に触れたものを見てみましょう。

地図の上
朝鮮国にくろぐろと
墨をぬりつつ秋風を聴く

子を叱り過ぎた
きまり悪きさびしさよ
家のまはりの地図などを引く

今のうちに
忘れぬうちに
故郷の村の地図を書いて置かんと思い立ちたる

「朝鮮国に」の歌は、日本帝国主義の植民地政策を鋭く批判した有名なものです。

後段のものは、死の前年の心身衰弱したころ、故郷渋民村を回想したときのものだといいます。残りの時間が少なくなったと感じたときに、生い立ちや故郷について書いたものを残しておきたい、心にとどめておきたいと思うのはごく自然のことでしょう。

しかし、書き残したいと思ったものを「地図」という言葉で代弁していることに、「地図好き人」は、とてもうれしくなります。啄木には、旅した北の地だけではなく、地図に対する特別な思い入れがあったのでしょうか。

「地図を引く」などという専門的な言葉もさらに嬉しいのですが、「啄木の地図」どこにあるのかと探したくなります。

「唯一、地図らしきものが残されているのは、関心を持った41編の英詩と、それらから感動を受けて綴った詩を納めた大学ノート『エブアンドフロー』の中で、故郷渋民村生出（おいで）から岩手山を望んだ風景画だけです」という答えが返ってきました（岩手県玉山村・啄木記念館　山本学芸員）。啄木自筆の故郷の地図といったものは、心の中だけであって、形としては残さなかったのかも知れません。

そして、明治四十五年（27歳のとき）次の歌を友人に残してこの世を去りました。

今も猶
やまひ癒えずと告げてやる
文さへ書かず深きかなしみ

ところが、啄木の地図・測量との関わりは死後にも訪れます。

啄木の遺骨は、妻節子の手によって東京浅草から函館に移され、函館市住吉町の立待岬に「啄木石川一々族之墓」と「東海の小島の磯の白浜にわれ泣きぬれて蟹とたわむる」と墨書した木標を建てて葬られました。ところが、その後の大正十五年、親友であり義弟であった宮崎郁雨らの手で新しい墓碑建立が計画され、現在のものになりました。

立て替えられた岬にある墓碑は、樺太の「日露国境天測標石」をモデルにしたものです。

周囲を海に囲まれた日本人測量技術者には、初めての国境測量の結果となるその石の一方には日本の菊花紋章、他方にはロシアの双頭鷲紋章が浮き彫りされていて、将棋の駒のような形をしたものなのです。この標石が持つ二面性といったものが、石川啄木の思想と通じるのだそうです。

函館立待岬の墓石の、あるいは東京神宮外苑の絵画館前の「日露国境天測標石」レプリカの前に立ち、啄木と地図との係わりを思い出して見るのもよいでしょう。

石川啄木（「石川啄木大全」講談社より）

「日露国境天測標石」レプリカ

【散歩ポイント】

「石川啄木一族の墓」：函館市住吉町（立待岬）　市営墓地

「日露国境天測標石（レプリカ）」：東京都新宿区霞岳町９　明治神宮外苑絵画館前

「石川啄木記念館」：盛岡市玉山区渋民字渋民９　019-683-2315

【地図の散歩道】―　文豪と地図　3　―

森鴎外の「東京方眼図」～森鴎外（1862-1922）

「小泉純一は芝日蔭町の宿屋を出て、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上の雪の電車に乗った。

（中略）

純一は権現坂のほうへ向いて歩き出した。二三歩すると袂から方眼図の小さく折ったのを出して、見ながら歩くのである。」

森鴎外(1862-1922）の『青年』（明治 43 年　1910）には、このようにあって、どこかの首相に似たような名の主人公に地図を持たせて、東京の町を散歩させています。

この作品に出てくる方眼図は、その前年に春陽堂から刊行した「森林太郎立案　東京方眼図」です。この最新の東京地図とは、どのようなものであったのでしょうか。それ以前、鴎外は地図に対してどのような思いを持っていたのでしょう。そして、地図の何が最新だったのでしょうか。

その森鴎外は島根県津和野に生まれ、12 歳のとき家族とともに上京し、1881 年東京大学医学部を卒業し、東京陸軍病院勤務を始めとして軍医となりました。谷あいの町津和野から上京した鴎外、彼にとっての東京は、地図なくしては歩けないほどの大都会であったと思います。この作品の主人公純一と同様に、どこへ行くにも小さく折った東京の案内地図を懐中に忍ばせていなければ、不安があったのではないでしょうか。

そして、1884 年から 1888 年までは、軍の衛生制度や衛生学といったものを研究するためドイツへ留学しました。幼少のころからオランダ語やドイツ語を学んでいたといっても、今のように事前に海外の詳細な地理や地図に接する機会は少なかったはずです。

留学に際して、夏目漱石も愛用したドイツ人の印刷業者カール・ペデカが創刊した旅行案内書「ペデカ」を買い求め、留学中は、このドイツ語のガイドブックを愛用したのだといいます。地図が身近にあることは、見知らぬ国での行動を豊富にしたのではないでしょうか。また、軍医としての留学でしたから、戦時用のドイツの地図に触れたこともあったと思われます。

東京大学付属図書館の鴎外文庫には、彼の所蔵した約 180 点もの古地図が残されています。いつのころから芽生えたものかは不明ですが、地図への特別な思い入れがあっての収集ではないでしょうか。

鴎外は留学から帰った後、東京を拠点にしながら、中国、台湾、小倉などを行き来する転勤生活を送ります。不案内の国や町では、やはり地元の地図やガイドマップを買い求めて行動したのではないでしょうか。あの、所蔵地図の中には、中国や小倉のそれも含まれています。

そして、永い転勤生活を終えて東京へ戻った鴎外は、日本の地図やガイドマップに抱いてきた不満が、未だ解消されていないことを知り、あの「森林太郎立案　東京方眼図」の作製にいたった（1909）のだと思います。

ガイドマップでしょうか、軍用図でしょうか、ヨーロッパで手にした地図がモデルとなったと思われる「東京方眼図」は、『青年』が発表される前年に作製され、小泉青年の懐中

に納められたのです。
　地図の体裁は、その名前のとおり、赤い方眼を入れて検索を容易にした地図と地名索引がセットになったもので、この手のものとしては日本で最初ということになります。

「森林太郎立案　東京方眼図」（複製）部分

森鴎外胸像

【散歩ポイント】
森鴎外旧宅・記念館：島根県鹿足郡津和野町町田　08567-2-3211
森鴎外旧宅：北九州市小倉北区鍛冶町 1-7-2
「森林太郎立案　東京方眼図」を入手して散策する。「森林太郎立案　東京方眼図」が付いている書籍、「一葉からはじめる東京町歩き」坂崎重盛著　実業之日本社　税別 1500 円

【地図の散歩道】―　文豪と地図　4　―

夏目漱石とペデカ ～ 夏目漱石（1867-1916）

「一束の地図」を残した正岡子規（1867-1902）と夏目漱石（1867-1916）は、帝国大学の同窓生であったということだけではなく、友として、人間的なことでも、文学面でも互いに大きな影響を与えました。

師でもある子規の「地図好き」の影響を受けたわけではないのでしょうが、夏目漱石もまた、地図を愛する人であったのです。

江戸の牛込馬場下で生まれた漱石は、鴎外のような地方出身者ではなかったから、都内散策に地図を重要視することはなかったかもしれません。しかし、松山中学、熊本五校への赴任、そして英国留学(1900)といった新天地への展開に際しては、地図を使用しなければならなかったでしょう。

といっても、松山や熊本で地図を多用したということは聞きません。一般的に、都会育ちの者が、地方小都市で生活を送るために地図をそれほど必要としないでしょう（というのは、偏見でしょうか）。

しかし、英国留学となると状況は異なります。

留学体験に取材した「倫敦塔」の中で、「まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中に抛りだされたような」、あるいは「恐々(こわごわ)ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用達しのため出であるかなければならなかった。」といっています。

さらに、街角に来るたびに地図を開き、地図で解らないときは人に聞き、人に聞いて解らないときは巡査に聞き、巡査で解らぬときはまたほかの人に尋ねるなどして、目的地にいたるのだとも言わせています。

かなりの、不安を持ってロンドンの街を歩いたのだと思います。

このとき漱石は、ドイツの旅行案内書「ペデカ」を愛用したことが明らかになっています。

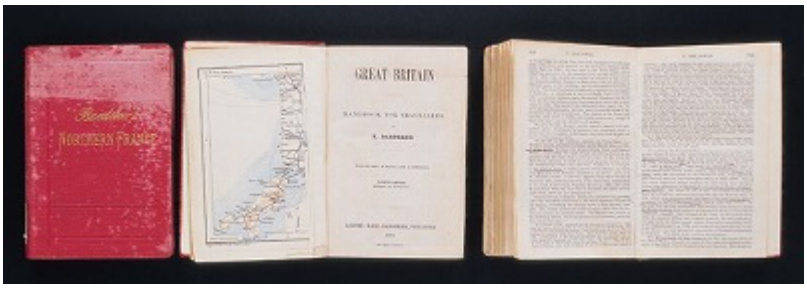
鴎外も使用したペデカ(Baedeker)は、1820 年代にドイツ人の印刷業者カール・ペデカが創刊した旅行案内書で、後にフランス語版や英語版も刊行され世界的に有名になったものです。

東北大学の漱石文庫には、彼が愛用した「ペデカ」が残されていて、そこには、多くの書き込みがあり、切り取り失われた地図があり、切り取られた後に貼付された地図もあるといいます。

この断片的な話を聞いただけで、ロンドン散策などの際にガイドブックの中の「地図」が活躍した様子が目に浮かぶようです。そればかりでなく、残された「ペデカ」のロンドン塔の記事部分には、多くの傍線が施されており、それは「倫敦塔」に生かされていることが見えるのだといいます。

同大学の漱石文庫には、本書のほか、（ノートの断片に記した）自筆イギリス地図というものも残されているそうです。

そればかりか、漱石の「硝子戸の中」（1915）には、
「私の家の定紋が井桁に菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使って、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いた（のか）」
「（一時区長という役を勤めていた・・・）父はまだその上に自宅の前にから南へ行く時に是非共登らねばならない長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた」
とあり、父親もまた勝手に？「喜久井町」や「夏目坂」といった地名をつけるほどの地図・地名に関心の深い人であったようです。
ああ、あの漱石もその父もまた「地図好き」だったのだと、言い切ってしまいましょう。



旅行案内書「ペデカ（Baedeker's London and its environs)」
（東北大学附属図書館 HP より）

夏目漱石胸像　早稲田南町（漱石公園）

【散歩ポイント】
夏目漱石記念館（内坪井旧居）：熊本市坪井町 4-22　096-325-9127
夏目漱石記念館：静岡県伊豆市修善寺 4279 - 3　0558-72-7222
夏目漱石誕生の地跡：東京都新宿区喜久井町１番地
夏目漱石終焉の地・胸像：新宿区早稲田南町７番地

夏目漱石の銅像：熊本市上熊本駅前
ロンドン　漱石記念館
東北大学附属図書館　漱石文庫

【地図の散歩道】―　文豪と地図　5　―

正岡子規の自筆地図 ～ 正岡子規（1867-1902）

科学者であり随筆家でもあった寺田寅彦（1878-1935）の作品に「子規自筆の根岸地図」というものがあります。そこには、寺田寅彦の手元に正岡子規（1867-1902）が寝たきりで動けなくなったころに、仰向けに寝ていて描いたと思われる、自宅から友人の家までの道筋を教えるために書き記してくれた地図が残されていることが記述されています。

寺田は、その地図から見える力強さに感心し、「正岡子規自筆根岸地図」とでも袋書きして大切に保存しなければならないと述懐しています。

さて、正岡子規が松山から上京し、母と妹を呼び寄せ住まいしたゆかりの子規庵には、「一束の地図」という彼が愛蔵した地図の束が残されています。「一束の地図」には、日本の官製地図が多いのですが世界地図も5枚含まれていて、これは書籍から引きちぎられたもののようだといいます。なぜ、大切な書籍から切り取ったのでしょうか。多摩美術大の平出隆氏によれば、松山市から上京する際に、その重さのために必要部分を切り取ったのではないかということ。となると子規と地図の係わりは、松山から始まるようです。

それを裏付けるように、「一束の地図」の中には、朱筆の入った地図のほか、手彩色がなされた1/200,000帝国図でしょうか『松山』があります。彼の手で彩色されたその地図は、あの切り取られた世界地図と色合いが似ていて、これを手本にしたことが考えられます。

子規もまた鴎外と同じように、日本にも「こんな地図が欲しい」と考えたのかもしれません。

子規は、幼少のころから絵画に興味を持ちました。絵画だけでなく短歌にも「写生」の重要性を言っています。俳句に関して「地図的観念と絵画的観念」という文章も残しています（明治27年「日本新聞」）。そこでは、蕪村の「春の水山なき国を流れけり」について、内藤鳴雪はこの句から景色が浮かんでくると評し、子規は何ら絵が浮かばない観念的句であると主張しました。その違いは、鳴雪が地図的観念で句を見ていて、私は絵画的観念で見ているからだと結論付けています。

私が、この評論に説明を加えることは恐れ多いのですが、それは地図における一般地形図と鳥瞰図の違いのようなものだと思われます。子規から見ると、蕪村のこの句は、その風景を多視点で拡がり深みを持つ鳥瞰図様に描いたものでないと言っているようです。

さらに子規は、「墨汁一滴」の中で、「この頃根岸倶楽部より出版せられたる根岸の地図は大槻博士の製作に係り、地理の精細に考証の確実なるのみならずわれら根岸人に取りてはいと面白く趣ある者なり」などと地図について評しています。当該地図は、明治34年大槻文彦作の「東京下谷根岸及近傍図」というもののことです。

後年永く病床にあった子規は、鴎外のように自ら立案した地図を刊行こそしませんでしたが、紹介した文章などの断片や地図への書き入れによって、地図に対する思い入れの深さが感じられると思うのは「地図好き人」の贔屓目のせいでしょうか。

子規庵　　正岡子規　　「一束の地図」

【散歩ポイント】

子規庵　東京都台東区根岸 2-5-11　03-3876-8218

松山市立子規記念博物館　松山市道後公園 1-30　089-931-5566

【地図の散歩道】―　文豪と地図　6　―

寺田寅彦と地図のことば ～ 寺田寅彦（1878-1935）

地図・測量を生業にする人は、寺田寅彦（1878－1935）の随筆を読むことで、あるいは一般の人々が地図・測量を応援する彼の作品を読んでくれているということで、大いに励まされて仕事をしてきました。

それは、主に随筆「地図をながめて」にあることです。

「『当世物は尽くし』で、『安いもの』を列挙したとしたら、その筆頭に上げられるべきものは陸地測量部の地図（であろう）・・・」「それだけの手数のかかったものがわずかにコーヒー一杯の代価で買えるのである。」といった、地図製作の難易さに比べて、その価格の低さについて触れているくだりが有名です。

さらに、「『地図の言葉』に習熟した人にとっては、一枚の図葉は実にありとあらゆる有用な知識の宝庫であり、もっとも忠実な助言者である相談相手である」ともいっています。いかにも、地図の理解者らしい言葉です。将来のことでは、都市化、重層化が進んだ首都では、地下各層の交通を示す立体地図が必要になるだろうと予測しています。

紙数に限りがありますから、これ以上詳細な紹介はできませんが、寺田の地図に対する考察は、使い手、作り手双方に訴えるものがあります。いまどきの作り手も、時折読み返しては地図作成に当たりたいものです。

そして、地図・測量人にとって最大の応援歌となるのは、人跡未踏の山岳地で熊との遭遇、暴風雨や落雷での負傷といった測量者の苦労について正確に紹介していることです（陸地測量部技師に取材した）。また、「三角測量に使用する櫓は、構造の狂いを防ぐため十分放置してから観測に取り掛かる」などのことは、現在の測量者には忘れられかけたことでしょう。

「地図をながめて」などで紹介されているような幾多の困難を乗り切り、細心の注意を払いながら測量が行なわれ、コーヒー一杯代価の地図が作成されたのです。

地図・測量人が、寺田に好意を寄せる鍵は、さらに一つあります。

これら、測量技術者を影で支える「測夫」について紹介していることです（「地図をながめて」と「小浅間」）。

彼らは、山中での測量に際して、測量助手として櫓を築き、観測補助をするだけでなく、時には「強力」となり荷を上げ、テントを張ります。観測に際しては、40 数キロメートルも先の目的の山々に登り、観測者に光を届けるのです。測量師は、向けられたこの光を目標に角観測をするのですが、太陽光を適切に反射させなければ、観測できません。微妙な調整は彼らの経験と技術があってのことです。

また、炊事・洗濯なども担当し、男所帯で主婦の役割もします。「測夫」なくして、初期の測量は完遂できなかったのです。

こうした下積みの人にも眼を向け、光を当て、地図・測量に正しい理解を持ってくれた寺田寅彦のことを、地図・測量人は、これからも、そしていつまでも感謝することでしょう。

寺田寅彦自画像

【散歩ポイント】

寺田寅彦記念館：高知市小津町 4-5　088-873-0564

高知県立文学館：高知市丸ノ内 1-1-20　088-822-0231